

パラアスリート、アーティストと  
ハンセン病差別撤廃をうったえよう

# GLOBAL APPEAL 2020

To End Stigma and Discrimination  
against Persons Affected by Leprosy

2020年1月27日(月) 17:00~18:30

会場:

ANAインターコンチネンタル東京 B1 プロミネンス

※車いす専用駐車場あり

主催: 日本財団

賛同: 国際パラリンピック委員会

協力: 日本財団パラリンピックサポートセンター

※日本語手話・日英同時通訳あり

参加費無料

詳細・お申し込み ▶



【お問い合わせ】 グローバル・アピール2020 運営事務局 (担当: 日本財団・田中)

TEL 03-6229-5377 (平日10:00-17:00)

EMAIL shf\_hd\_pr@shf.or.jp



ドゥエーン・ケール副会長  
(国際パラリンピック委員会)



マセゾン美季さん  
(日本財団パラリンピック  
サポートセンター)



池透暢選手  
(車いすラグビー日本代表)



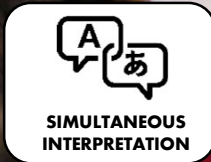
伊藤真波さん  
(バイオリニスト)



木下航志さん  
(シンガーソングライター)



入場  
無料  
先着150名様  
申込受付中!



## グローバル・アピール2020 ラウンドテーブル

# テーマ 「『違う』を当たり前」

日時 2020年1月27日(月) 14:30 - 16:00  
(受付 14:00~)

会場 ANAインターコンチネンタル東京 B1「ギャラクシー」 (東京都港区赤坂 1-12-33)



マセソン美季氏

### <基調講演>

日本財団パラリンピックサポートセンター  
推進戦略部プロジェクトマネージャー マセソン美季氏

### <ラウンドテーブルディスカッション>

ファシリテーター 人権教育啓発推進センター理事長 坂元茂樹氏

ハンセン病回復者、義肢装具士、歴史継承に携わる学芸員、ジャーナリスト等、ハンセン病の問題を見つめてきた様々な立場の専門家達と、これからの社会のあり方について考えてみませんか。

詳細・お申し込み▼

### 【ラウンドテーブルに関するお問い合わせ】

グローバル・アピール2020運営事務局 (担当) 富崎

TEL : 03-6229-5377 (平日10:00-17:00)

MAIL : shf\_hd\_pr@shf.or.jp



<https://ez-entry.jp/ga2020/entry/>

## グローバル・アピール2020

### ～ハンセン病患者と回復者に対する社会的差別撤廃に向けて～

#### グローバル・アピール2020 宣言式典

日時：2020年1月27日（月）17:00～18:30（受付：16:00開始）

場所：ANAインターコンチネンタル東京 プロミネンス（B1フロア）

主催：日本財団 賛同団体：国際パラリンピック委員会(IPC)

協力：日本財団パラリンピックサポートセンター

プログラム：

17:00～ オープニング、主催者挨拶

日本財団会長 笹川陽平、国際パラリンピック委員会副会長 ドウエーン・ケール

17:20～ ハンセン病当事者代表挨拶

全国ハンセン病療養所入所者協議会会長 森和男

インドハンセン病回復者家族代表 チャンドラ・クマール

17:40～ アーティストによる音楽パフォーマンス

シンガーソングライター木下航志、バイオリニスト、パラリンピアン 伊藤真波

18:00～ グローバル・アピール宣言

車いすラグビー日本代表 キャプテン 池透暢

日本財団パラリンピックサポートセンター マセソン美季

#### グローバル・アピール2020 ラウンドテーブル ～「違う」を当たり前～

日時：2020年1月27日（月）14:30～16:00（受付：14:00開始）

場所：ANAインターコンチネンタル東京 ギャラクシー（B1フロア）

主催：笹川保健財団 後援：人権教育啓発推進センター

協力：日本財団パラリンピックサポートセンター

プログラム：

14:30～ 開会挨拶 人権教育啓発推進センター理事長、同志社大教授 坂元茂樹

14:35～ 基調講演 日本財団パラリンピックサポートセンター マセソン美季

14:45～ ディスカッション

多磨全生園元自治会長 森元美代治、義肢装具士 大野祐介

朝日新聞論説委員 高木智子、長島愛生園歴史館学芸員 田村朋久、

日本財団パラリンピックサポートセンター会長 山脇康

15:30～ 質疑応答

15:50～ 閉会挨拶 笹川保健財団常務理事 南里隆宏

※両イベントとも日本語手話、日英同時通訳付き

#### ハンセン病差別撤廃のためのグローバル・アピール

世界からハンセン病差別をなくそうと、日本財団が、「世界ハンセン病の日（1月最後の日曜日）」にあわせ、毎年、世界的に影響のある個人、団体と共に、ハンセン病の差別撤廃を社会に訴える啓発活動。2006年に始まったこの取り組みは、社会を構成する一人ひとりがハンセン病について正しく知り、差別をしないよう、メディア等を通じ広く発信し、働きかけることを目指している。

<https://www.nippon-foundation.or.jp/what/projects/leprosy/advocacy/#advocacy1>

#### 日本財団のハンセン病問題に対する主な取り組み

日本財団は、1960年代にこのハンセン病に対する取り組みを開始し、1975年からは世界保健機関

(WHO) が実施する「公衆衛生上の問題としてのハンセン病制圧」(注)活動のパートナーとして、世界のハンセン病制圧に取り組んできた。1980年代にMDT(多剤併用療法:複数の薬剤を併用するハンセン病治療法)が開発されてハンセン病が治る病気となったこと、その後日本財団が治療薬の無償配布を行い(1995年～99年)、患者数が激減したことは、ハンセン病制圧の大きな転換点となった(2000年以降は製薬会社ノバルティスが治療薬の無償配布を現在まで引き継いでいる)。

1985年当時122カ国あったハンセン病未制圧国は現在では1カ国(ブラジル)に減少し、1700万人以上の患者が治癒したが、一方、患者、回復者およびその家族に対する差別は、未だに深刻な問題として世界中に存在している。(注:人口1万人あたりの患者数が1人未満となることを指す。)



## グローバル・アピール 2020 登壇者・参加アスリート・アーティストプロフィール

※個別取材をご希望される場合は取材調整可能日をご確認の上、別紙にご記入ください。ご取材は確約ではありませんのでご了承ください。



### 木下 航志 (シンガーソングライター)

和製スティービー・ワンダーこと木下航志は未熟児網膜症の為、生後一か月で失明。2歳からピアノをスタート。10歳の時NHKのドキュメンタリーT V番組にて紹介される。14歳で再びNHK「木下航志 14歳の旅立ち」で紹介される。2005年愛・地球博EXPOのジャパンウィークに参加。2006年デビューアルバム「絆」をリリース。2009年国連本部にてパフォーマンスを行う。2017/18年パラフェス、パラ駅伝でパフォーマンスを行う。現在まで3枚のミニアルバム、2枚のフルアルバム、3枚のシングルをリリースしている。



### 伊藤 真波 (バイオリニスト、パラリンピアン)

看護学生だった20歳の時バイク事故に遭い右腕を切断する。引きこもりの人生を覚悟したが、幼少期からの夢だった看護師の夢を諦めきれず立ち上がる決意をし、看護師の道をもう一度歩み始める。看護師として働く傍ら、リハビリのために始めた水泳を本格的に取り組み2008年北京・2012年ロンドンパラリンピック競泳日本代表となる。また幼少期の習い事であったバイオリンを再開する。10年程前に多くの人達の力を借りバイオリン専用の義手製作に取り組み。試行錯誤し未だ完成していない義手だが、多くの人達の愛が込められている義手を使つてのバイオリン演奏を披露する。



### 池 透暢 (車いすラグビー日本代表 キャプテン)

2000年に交通事故による火傷で四肢障害を負い、車いす生活となる。2002年から車いすバスケットボールを始め、2012年に車いすラグビー競技に転向、翌年車いすラグビー日本代表強化指定選手に選出され、2014年には車いすラグビー日本代表のキャプテンに任命される。2015年にアジア・オセアニアチャンピオンシップで初優勝。2016年、リオデジャネイロパラリンピックで銅メダルを獲得。2018年にジャパンパラ車いすラグビー競技大会で優勝、GIO2018 IWRP車いすラグビー世界選手権で初優勝。2019年、アジア・オセアニアチャンピオンシップ2位、車いすラグビーワールドチャレンジ3位の戦績をおさめる。日興アセットマネジメント株式会社 Freedom 所属。



### ドゥエーン・ケール (国際パラリンピック委員会副会長)

1996年夏季パラリンピックで銀メダルと銅メダルとともに4つの金メダルを獲得したニュージーランドのパラリンピック水泳選手。2008年、2012年に夏季パラリンピックのニュージーランドパラリンピックチームのミッションシェフを務める。2013年国際パラリンピック委員会運営委員会のメンバーに選出され、副会長を務める。



### マセソン 美季 (日本財団パラリンピックサポートセンター)

パラリンピックを題材に、インクルーシブな考え方を若い世代に伝え、教育を通じた社会変革の推進に取り組んでいる。国際パラリンピック委員会、国際オリンピック委員会の教育委員会委員。長野1998パラリンピック冬季競技大会の金メダリスト。選手引退後は、「誰も置き去りにされない社会」を目指し、特に障害のある人たちの活躍の場が拡大していくことを求め、様々な取り組みを国内外で続けている。



### チャンドラ・プラカシュ・クマール(インドハンセン病回復者家族代表)

ハンセン病回復者家族とともにハンセン病コロニーで生まれ育つ。現在は、インドのカルナタカ州マンガルールにある Sarosh Institute of Hotel Administration でホテルマネジメントの学士号取得を目指し勉強中。帰省時には、コロニーの若者と時間を共にし、彼らが将来自立できるよう教育指導などを行っている。また、他の地域のコロニー住人へも技術的、教育的支援を行い、ビハール州にある60を超えるコロニーを訪問する活動を続ける。あるとき、アレラージ(ビハール州の小さな場所)の公立学校がハンセン病コロニー出身者の入学を拒否するという出来事があり、クマール氏は現地NGOのメンバーと校長や学生組合のリーダーに会い抗議活動を行った。その後、彼らの地域では差別的な出来事は起きていない。夢は故郷にレストランをオープンすること。



### 森 和男(全国ハンセン病療養所入所者協議会 会長)

9歳になる前にハンセン病を発症し、同じくハンセン病を発症していた姉キヨコさんと共に大島青松園に入所。長島愛生園内にある岡山県立邑久高等学校・新良田教室を卒業後、大阪市立大学へ進学。大阪の商社に就職したが、体調悪化により1971年に大島に戻っている。大島青松園自治会「協和会」会長のほか、全国ハンセン病療養所入所者協議会(通称・全療協)会長も務める。



### 森元 美代治 (多磨全生園元自治会長、特定非営利活動法人 IDEA ジャパン元理事長)

奄美大島、喜界島出身。中学3年生でハンセン病を発症、1952年に国立奄美和光園に入所。大学進学のため多磨全生園に転園し、慶應義塾大学に入学、卒業後、都内金融機関に就職するがハンセン病の再発により全生園に再入園。1996年に日本で初めてハンセン病患者として実名でカミングアウト。1999年、ハンセン病訴訟原告団事務局長となり、国家賠償をもとめる原告のまとめ役としても力を尽くした。2002年、多磨全生園を対処。2004年にハンセン病患者・回復者・支援者の国際ネットワーク IDEA の日本支部、IDEA ジャパンを設立し理事長となる。2019年8月にIDEA ジャパンは解散、その後もハンセン病患者の人権回復を訴え、国際的に活動している。